

英国における中国の映像（Ⅲ）

Sir William Chambers と彼の英華式庭園

西 尾 朗

英国が中国の庭園に積極的な興味を抱き、自国の土地にその造園様式の移植を試みたのは、18世紀後半のことである。もちろん、かかる試みはなにもこの時期にはじまったわけではなく、Sir William Temple (1628—99) や Joseph Addison (1672—1719) らの著述にも見られるように¹⁾、英国は早くから中国の庭園美に注目、その独得な造園法に深い関心をよせていたことはいうまでもない。ただ、当時はなに分にも十分な資料がなく、しかも、複雑な造園様式のため、英国における中国風庭園は、ついに18世紀後半までその実現をみることはできなかった。

中国の庭園様式を本格的に英国に導入したのは Sir William Chambers である。彼は、まず、中国に関する著書、「中国の建物、家具、服装、器具、および日用品の意匠」〔*Designs of Chinese Buildings, Furniture, Dresses, Machines and Utensils* (1757)〕と、「東洋庭園論考」〔*Dissertation on Oriental Gardening* (1772)〕を出版し、その中で彼は中国の造園法を詳細に紹介する傍ら、実際に中国風の庭園を英国につくり、絵画的美しさを強調する当時の英国庭園の様式と、変化と感覚的な美しさを強調する中国庭園の様式とを折衷した新しい庭園のスタイルを確立した。それが英華式庭園 (Anglo-Chinese Garden) である。彼が当時、王室庭園であった Kew Gardens に設計した庭園は、その代表的なものといえよう。

われわれは、この英華式庭園の原理ともいうべき上に掲げた彼の著作の検討は、紙数の関係上、他の機会にゆずり、本稿では Chambers の業績のいくつかを年代順に紹介し、学者として、また

建築技師としての彼の側面を明らかにすると共に、彼の考案による英華式庭園の特色について簡単に触れたいと思う。

Willam Chambers の生まれた年については一定した資料はない。*The Dictionary of National Biography* や *Who's Who in Boswell* などは、共に彼の生年を 1726 年と断定しているが、最近の研究は、1722 年説、あるいは 1723 年説の立場をとることが多いようである。これから述べる彼のいくつかの業績から判断して、1722 年説、あるいは 1723 年説が至当ではないかと思えるので、本稿では、彼の生まれた年を、一応、1723 年としておきたい。彼はスウェーデンの港街、Gothenburg に住む英国の商人の子として生まれた。幼少の頃、父に連れられて英国に渡り、Yorkshire の Ripon に住む祖父の家にあずけられ、そこで教育を受けた。彼が、この祖父の家でどのような教育を受けたか、その間の事情を伝える資料はないが、とにかく彼は 16 才になる頃まで、この静かな伽藍の街に住んでいた模様である。1739 年の暮、彼は再び両親が住む Gothenburg に帰り、翌年、父の世話でスウェーデン東印度会社に入り、これが契機となって、彼と中国との関係がはじまることになる。

彼は 1740 年から 49 年まで、この会社に勤務するが、この 9 年間の在職期間中、彼は 3 回、東洋の地を踏む機会に恵まれた。第 1 回目は 1740 年からおよそ 2 年間、会社の貨物船 *Fredericus Rex Sueciae* 号の乗組員として印度を訪れ、第 2 回目と第 3 回目は高級船員として、あるいは駐在員として、中国に滞在した。中国での彼の滞在期間は

1743年から45年までと、1748年の上半期の2回、通算約2年半ほどであった。いずれの場合も駐在地は広東であった。この間彼は、言語、風俗、習慣など、いろんな方面に関心をもったが、この頃すでに建築家を志していた彼にとって、この広東駐在から得た最大の収穫は、なんとといっても中国の建築や庭園がもつ美の発見であった。美しい曲線を描く寺院の薨、天空高くそびえ立つ塔の雄姿、自然そのままを取り入れたような落着きのある庭園、故郷スウェーデンや英国では、とても想像することもできないこれらの異国美に接して、彼は非常な感動を受けたことは容易に想像することができる。余暇の許す限り、スケッチブックと巻尺を手に彼は、広東の街をスケッチや測量に出掛けた。だが、この異国での建物のスケッチや測量には、相当の困難が伴ったようである。広東のような中国の代表的国際都市においても、当時、かなり、排他的な気分が残存し、外国人に対し警戒心や疑惑心を抱く分子もかなりいた。特に、Chambersのように目ばしい建造物を求めてそれをスケッチしたり、測量したりする外国人に対して、彼らの疑惑の眼はことのほか厳しかったに違いない。事実、彼の研究も、このため、しばしば妨害を受けた。測量中、突然、群衆に取りかこまれ、侮辱されたり、投石されることも再三あったらしい。彼はこのことを次のように書いている。

[It was] a matter of great difficulty to measure any publick work in China with accuracy, because the populace are very troublesome to strangers throwing stones, and offer [ing] other insults.²⁾

だが、かかる不愉快な出来事が彼の身邊に繰り返えされたにもかかわらず、彼の中国建築や庭園に対する情熱は、それに反比例して、ますます高まっていった。彼は、また、出来る限り多くの中国人に接し、彼らの意見を自分の研究の資に用いた。彼の中国に関する代表作「中国の建物、家具、服装、器具および日用品のデザイン」と「東洋庭園論考」は、この時代の彼の研究をまとめたものである。

1749年、中国への最後の旅を終えた Chambers は、スウェーデン東印度会社を退職、かねてから志

していた建築の研究に専念することになる。そして彼は研究の対象を、いままでの中国建築から西洋建築へ移し、これから1755年までの6年間は、彼は欧州大陸で、主としてルネッサンス期の建築の研究に打込んだ。まず最初の1年間はパリーに滞在し、17世紀のフランス建築、とくに、ルーブル宮殿の増築工事に敏腕を揮った Claude Perrault や、ヴェルサイユ宮殿の改築者として有名な Jules Hardouin-Mansart の作品を研究した。1750年の暮、彼は住居をローマに移し、巨匠 Michelangelo や、その弟子 Jacopo Barozzi Vignola の作品を中心に研鑽を積んだ。この間、彼はローマを根拠地として、イタリア各地を旅行し、とくにヴェネツィアでは、古典様式を盛り込んだ Andrea Palladio の作品に強い興味を覚え、大きな影響を受けた。1755年、約5年に亘るイタリア滞在を終え、彼はロンドンに帰るが、このイタリア時代における研究の成果は、4年後に出版された「一般建築論」(*Treatse on Civil Architecture*) に、さらにもっと具体的な形として彼がロンドンの中心部、Strand 街に建てた Somerset House の建築にみることができる。

さて、ロンドンに帰った Chambers の身に思わぬ幸運が待ちうけていた。彼はしばらく Poland 街で無名の建築家として生活していたが、やがて York の建築家として知られる John Carr によって才能が認められ、さらに Bute 伯爵、すなわち John Sutart の推挙で当時、未だ皇太子であった Gerge III 世に建築学を進講することになった。これが機会となって彼は George III 世の知遇を得、同 III 世が即位するや、彼は一挙に宮廷建築技師に起用された。

宮廷建築技師として彼が着手した最初の仕事は、ロンドン郊外 Surrey にある王室庭園、Kew Gardens の設計であった。設計に当って彼が、まず計画したことは、彼が、かつて広東で見聞し研究した、中国庭園の造園方法を Kew Gardens に試みることであった。現在、Kew Gardens は Royal Botanic Gardens として大巾な拡張が行なわれたため、彼の設計による庭園の原型は殆んど残っていないので、それを知るすべもないが、Sirén の伝えるところに依れば、Chambers は庭園全体を五つの部分 (section)、すなわち 'The

‘Exotic Garden’, ‘The Flower Garden’, ‘The Parterre’, ‘The Pheasant Ground’, ‘The Wilderness and the Lake’ に区分し、それぞれに特徴のある ‘scene’ を設けたようである³⁾。また、庭園の装飾建築物も、洋の古今東西を問わず、できる限り異なった形式のものを用いた。例えばローマの廃墟を思わせる建物はじめ、mosque 風の建物もあれば、Gothic 風の chapel もあり、また、Balbeck の建物をモデルにした ‘The Temple of Sun’ と呼ばれるものもあれば、中国の孔子廟を真似た ‘House of Confucius’ と呼ばれるものがあり、その上、古典的風格を備えた西洋風の建物 Orangery もあるといったように、各種各様の形式からなる建物を並置することにより、それぞれの ‘scene’ の効果をはかった模様である。当時の建築のうちで、とくに人気があり、今日もまだ残っているものに Chinese Pagoda がある。高さ 163 フィート、八角型、10 階建てのこの塔は、Kew Gardens における Chambers の中国への情熱を物語る文字通りの金字塔といえよう。

約 5 カ年に亘る Kew Gardens の建設は 1762 年に完成したが、この建設と平行して、Chambers は二つの書物を出版した。その一つは、1757 年に出版された「中国の建物、家具、服装、器具、および日用品のデザイン」であり、他は 1759 年出版の「一般建築論」である。先でもちょっと触れたように、前者は彼が中国滞在中に見聞した風物、建築、庭園などを、彼自身の意見をまじえて紹介したもので、とくに、その本の一章を飾る ‘The Art of Chinese Gardening’ は、当時の中国庭園論としては後年、彼が出版した「東洋庭園論考」と共に白眉の作である。後者、すなわち「一般建築論」は、彼のイタリア時代の建築研究を集大成したもので、とくに彼が Palladio 派の建築様式を重視している点、古典派としての彼の立場を明らかにした本といわれている。また、この本は長い間、建築学の standard book として広い範囲の読者をもった。Strawberry Hill の文人として有名な Horace Walpole もその読者の一人で、彼はこの本を次のように評している。

Mr. Chambers’s Treatise on Civil Architecture, is the most sensible book, and the

most exempt from prejudices, that ever was written on that science.⁴⁾

Kew Gardens が完成した翌年、1763 年、Chambers は同庭園の設計に関する詳細な報告ともいふべき、「キューの庭園と建築の設計、立面図、断面および鳥瞰図」(*The Plans, Elevations, Sections, and Perspective Views of the Gardens and Buildings at Kew*) を図型入りで出版したが、Kew Gardens の原型が殆んど消滅してしまった今日、この書は Chambers の当時の設計を知るうえに、貴重な資料となっている。

Kew Gardens の完成と、上記の三書の出版で、彼の名は国の内外に急速に知れ渡ったことはいうまでもない。1763 年からのおよそ 9 年間は、それを裏書きする時期といえよう。まず、1768 年、彼は国王 George III 世によって王室建造物監督長官 (Surveyor General of All His Majesty’s Works) の地位を与えられたのをはじめとして、1770 年にはスエーデンの王室から勲章を、さらに 1771 年には英国王室から knight の爵位を、それぞれ授与された。一方、学会でも、彼は画家 Sir Joshua Reynolds らと共に英国王立美術院 (English Royal Academy) の設立に奔走し、1768 年、同美術院が設立されるや、初代の会計担当の役員に選ばれた。彼は、また、パリーをはじめフイレンツェやストックホルムの国立科学院 (Academy of Science) の有力なメンバーとして活躍した。

かように Chambers は英本国はもとより、大陸からも高い評価を受けるにいたったが、建築家として、また造園家として彼を歴史の上に決定づけたのは、1772 年出版の「東洋庭園論考」と、ロンドンの Somerset House の建設である。最初に断ったように「東洋庭園論考」の紹介は稿を改めて書くこととし、ここでは触れずにおく。ただ、ここでは同書は George III 世に献呈されたものであること、また、同書の再版には Tan Chet-Qua と名の中国人が執筆した ‘Explanatory Discourse’ が付け加えられたことを指摘しておく。もちろんこの本が出版されるや、大きな反響の渦をよび、毀誉褒貶の意見が活発に交わされたが、この書は当時の人びとの中国庭園に対する認識を高める重要な役割を演じたことはいうまでもな

い。

Somerset House は、周知の如く、John Vanbrugh の設計による Blenheim Palace と共に、18世紀英国を代表する建築である。一代の権勢を振った Somerset 公爵こと、Edward Seymour の邸宅跡に、Chambers が Somerset House の建築を命ぜられたのは 1775 年のことで、翌 1776 年に礎石がすえられ、約 10 年の年月を費して建築は 1786 年に完成した。建物はコリント様式を用い、Dorset 州 Isle of Portland 産のいわゆる Portland stone を使った古典的な建物で、当初は、王立美術館と英国学士院のために建てられたものだが、後年、英国海軍省が使用、現在は、戸籍本署 (Registrar-General's Office)、遺言検認登記本部 (Probate Registry)、それに内国税収入局 (Board of Inland Revenue)、などが共同で使っている。完成直後、古物愛好家として有名な Jeremiah Milles は “magnificent and noble structure”⁵⁾ と、この建物の見事な出来栄を手放しでほめたが、一方、George III 世の寵を受ける Chambers に対するやっかみから、この新しい建築物に不満や中傷をぶつける批評家少なくなかった。下に記した批評の一部は、その代表的なものといえよう。

This stupendous and extraordinary heap of stones is altogether a most surprising assemblage of contradictory objects. The entrance or atrium is so inappropriate that it looks like the narrow mouth of economy, through which we grope our passage to the vast stomach of national ruin.... At the termination of the vestibule is a large bronze statue of the King, who seems placed there for no other purpose but to take cognizance of the exits and entrances of the clerks and watchmen, as if he kept a day-book to check their time. Beneath the nose of the sovereign is a putridinous pool of stagnant water.... I have no doubt but that the effluvia from the green liquid is more pestilential than that imputed by Virgil to the lake Averno, which is reported to have killed all the birds that flew over it.... The keystones of the arches are wonderfully carved in alto-relievo with

colossal marks of the Ocean, and the rivers of Britain, among which the Thames looks particularly sulky, as not having forgot or forgiven the irruptions made upon filthy domain by this saucy edifice.⁶⁾

だが、このような酷評は当たっていない。何故なら、後年、この建物はかかる酷評に打勝つほど、多くの有名な文人墨客に親しまれ愛されてきたからである。その典型的な例として、長詩 *The Village* の作者で有名な George Crabbe は、彼の日記の一頁に、

Write some lines in the solitude of Somerset House, not fifty yards from the Thames on one side, and the Strand on the other; but as quiet as the sands of Arabia.⁷⁾

と書き、詩想を練るのにこの静かな建物が如何に役に立ったかを述べている。また、現代英国批評で critical な批評をする Anthony Sampson できえ、近代建築が林立する現在のロンドンにおいて、未だ Thames 河畔に古色蒼然として立っているこの建物を “the beautiful riverside building” と書いている⁸⁾。如何に、この建物が時の流れを越えた傑作であるか、容易に理解されよう。

Chambers はこのほか、イングランドのみならず、スコットランドやアイルランドにまで出掛け、建築や庭園の設計に数々の業績を残したが、今日、その殆んどは当時の原型残していない。

晩年の彼は、主として社交に時を用いたようである。彼は ‘The Architects’ Society’ という名のクラブをつくり、毎月一回 The Thatched House Tavern で友人らと集っては歓談の時を過ごした。非常に明るい性格だったため、交際の範囲も広く、文筆家 Samuel Johnson をはじめ、Oliver Goldsmith などと親交をもつ傍ら、画家の Joshua Reynolds や、劇俳優の David Garrick らとも親しくした。

1796年 Somerset House が完成して約 10 年のち、彼は兼ねてから患っていた喘息がもとで他界し、Westminster 寺院の Poets’ Corner に葬られた。

以上、手許にある乏しい資料により Sir William Chambers の生涯と主な業績を年代順に略述したが、この短かい紹介を通じても明かなように、彼は非常に多角的な才能の持主であった。「一般建築論」や「東洋庭園論考」その他、彼の著述の出版にもみられるごとく、彼は学者であり、また同時に、Kew Gardens や Somerset House の建築を設計した建築技師でもあった。さらに重要なことは、研究面で彼は西洋建築の研究家であると共に、東洋、殊に中国庭園の研究家であったという事実である。かかる東西建築様式に精通した彼の Janus 的側面があってこそ、彼が英華式庭園 (Anglo-Chinese Garden) という独得で斬新な庭園のスタイルを、大陸諸国にさきがけて着想することができ、そしてその paragon を Kew Gardens に築き上げることができたといえよう。

さて、Chambers が英国の庭園に中国の庭園様式を取り入れて、いわゆる英華式庭園をつくろうとした主たる目的をひとことではいえず、それは当時の単調な英国の庭園様式に「変化」(variety) を与え、視覚よりも感覚に訴える庭園をつくり出すことにあったといつてよからう。Claude Lorraine や Nicolas Poussin、それに Salvator Rosa などのフランスやイタリアの風景画家たちの影響を受け、William Kent によって定着をみた当時の英国の庭園様式は、景色を庭園内に再現させることをあまりに強く意図したため、絵画的な美しさはあったが、庭のもつ情趣といったものに欠けていた。そこには庭を鑑賞する者の心を楽しませるものはなに一つなく、ただ茫漠たる自然の風景が庭園という枠の中に収められているに過ぎなかった。Chambers は「東洋庭園論考」の中でその無粋さを評して

Our gardens differ very little from common fields, so closely is vulgar nature copied in most of them: there is generally so little variety, and so much want of judgment in the choice of the objects, such a poverty of imagination in the contrivance, and of art in the arrangement, that these compositions rather appear the offspring of chance than design; and a stranger is often at a loss to know whether he be walking in a common meadow, or in a pleasure ground, made

and kept at a very considerable expence: he finds nothing to delight or amuse him; nothing to keep up his attention, or excite his curiosity, little to gratify the senses, and less to touch the passions, or gratify the understanding.⁹⁾

と述べ、また、その単調さや味気なさは、さながら「真面目な独身者の食事」¹⁰⁾ のようだといっている。

かかる単調な英国の庭園様式を救う救済策として彼が提唱したのが、中国の造園法である。彼は、まず、中国の庭園がもつ多彩にして変化に富む造園の仕方に注目し、その造園法を英国の庭園に試みた。それは、“the aim of the [Chinese] gardner is to imitate all her natural irregularities”¹¹⁾ と彼自身述べている如く、自然を画一的にとらえ、その姿を庭園に再現するという当時の造園法とは異なり、自然のあらゆる姿や様相を一つの庭園内に取り入れ、variety に富んだ庭をつくり上げることであった。そのため、彼は庭全体をいくつかの部分 (section) に区切り、そのおのおの、それぞれ対照的な景色 (scene) をを設定し、それを通じて、自然の多彩な様相を表現しようとした。つまり、庭園内を散策する人が、ある地点では一つの ‘scene’ を、そして別な地点ではまったく別の ‘scene’ を鑑賞し得るように、いくつかの違った小庭園を同一庭園内に設計することであった。すでに触れたように、彼は Kew Gardens を設計するに当り、彼は庭の全域を五つの部分、すなわち、‘The Exotic Garden’, ‘The Flower Garden’, ‘The Parterre’, ‘The Pheasant Ground’, ‘The Wilderness and the Lake’ に分け、それぞれに個性をもたし、庭全体の変化をはかったのは、‘natural irregularities’ を模倣することを主眼とする中国の造園の仕方を、具象化したものといえよう。

Chambers はかように中国庭園の造園様式を用いて単調な当時の英国庭園に variety を与え、その改良をはかったが、一方、彼はまた、庭園の装飾、殊に建築物の使用においても多彩な中国の庭園様式を用い、装飾建築物の少ない当時の英国庭園の改良を呼びかけた。彼は ‘House of Confucius’ や ‘Chinese Pagoda’ などをはじめ、中近

東の 'The Temple of Sun' や西歐風の 'Orange-ry' など、古今東西のさまざまな建築を Kew Gardens に用い裝飾建築における変化をはかったのはこのためである。そのモデルとなったのは、恐らく円明園の建築物であろう。彼は「東洋庭園論考」の中で、円明園の建築物のことに触れ

There are, beside the palace, which is of itself a city, four hundred pavillions, all so different in their architecture, that each seems the production of a different country.¹²⁾

と、多少の誇張を交えて述べているが Chambers 自身は中国滞在中は広東に終始在住していたのだから、おそらく、円明園の裝飾建築物についての上述の記事は、人から聞いた事柄を基にしたものであろう。ともあれ、彼が中国の庭園に裝飾建築物が多く使用されている事実に着目し、その様式を英国の庭園の中に取り入れたことは、variety に富む scene の設定と共に、庭園自体に厚みと立体感を与え、平板な古い庭園様式から英国の庭園を脱皮させる結果となった。そしてこの脱皮は視覚に訴える庭園から感覚に訴える庭園への移行を意味すると共に、幾何学的な美しさや平面的な美を追求する当時の擬古典主義の美の規範と明らかに対立する新しい美の規準をつくり出すきっかけとなった。この意味で、中国の要素を取り入れ、Kew Gardens に実現を試みた Chambers の英華式庭園の設計は、たとえそれが庭園という限られた範囲における美の変革であったにせよ、Lovejoy も指摘しているように¹³⁾、より自由なそしてより感覚を重じる romanticism の風潮を発芽させる要素を内蔵していたことは否めない。

Kew Gardens における英華式庭園の建設は当然英国はもとより、大陸諸国に大きな反響を生んだ。英国では英華式庭園の是非について文壇では論争を生み、またフランスでは Le Nôtre をはじめとする伝統派と覇を争い、ついに Petite Trianon における英華式庭園の建設でその落着をみるにいたる。一方、ドイツでは中国風家屋や橋その他、裝飾建築物の流行を生んだ。下に引用する Kiel 大学の美学教授、C.S.E. Hirschfeld の言葉は、Chambers の「東洋庭園論考」に対する彼

の書評の一部であるが、当時、大陸のひとつとが英華式庭園に対して懐いた心情を吐露したものと云ってよからう。

Of all the gardens of all the different parts of the world, none has excited more attention than the Chinese, or that which has been so charmingly described as such. So much is certain, that the Englishman is possessed by a strong prejudice in favour of this kind of garden, and that the Frenchman, and with him the German, is beginning to abandon himself to this prejudice. What people for now is not gardens laid out according to their own ideas, or in better taste than the old, but Chinese or Chinese-English gardens.¹⁴⁾

ところで、Chambers が庭園設計に当って中国の要素を導入したのは、なにもそのころ流行した中国趣味への迎合を意図したことによるものでもなければ、それは彼みずからが当時の中国熱に耽溺したことを証左するものでもない。すでに述べたごとく、西洋の古典建築に通暁し、その蘊蓄を Somerset House に刻みつけた彼は、山田智三郎氏も指摘されているように、中国趣味に溺れるには「余りにも才能があった¹⁵⁾」のである。彼が中国の要素を使って英国古来の庭園様式の改良をはかったのは、むしろ、当時曲り角にきていた擬古典主義からの脱却にあったといえよう。換言すれば、それは伝統を重んじ、形式にこだわる擬古典主義の堅苦しい桎梏から英国の庭園様式を解放し、その活路を中国に求めるひとつの試みであった。かかる意味で、Kew Gardens に建設した Chambers の英華式庭園は、たとえそれが東洋と西洋の「奇妙な雑種¹⁶⁾」であるとしても、時代の移行を物語るひとつのエピソードであり、またそれは英国における擬古典主義の終末を象徴するものといっても過言ではあるまい。

(注)

- 1) Sir William Temple, *Works* III, pp 229-230, Arthur O. Lovejoy, *Essays in the History of Ideas*, p. 111, および Joseph Addison, *The Spectator* (414), III, p. 286

- 2) R. C. Bald, "Sir William Chambers and the Chinese Garden" *JHI*, XI, (June, 1950) p. 288
- 3) Osvald Sirén, *China and Gardens of Europe*, p. 72
- 4) *Boswell's Life of Johnson*, IV. p. 187 脚註
- 5) J. L. Smith-Dampier, *Who's Who in Boswell*, p. 83
- 6) Arthur Trystan Edwards, *Sir William Chambers*, pp. 17-18
- 7) *The Life of George Crabbe by His Son*, pp. 237-238
- 8) Anthony Sampson, *The New Anatomy of Britain*, p. 510
- 9) William Chambers, *Dissertation on Oriental Gardening*, Preface および Arthur O. Lovejoy, *Essays in the History of Ideas*, p. 125
- 10) William Chambers, *Dissertation on Oriental Gardening*, p. vii
- 11) William Chambers, *Dissertation on Oriental Gardening*, p. 14
- 12) William Chambers, *Dissertation on Oriental Gardening*, p. 35
- 13) Arthur O. Lovejoy, *Essays in the History of Ideas*, PP. 99-135
- 14) Adolf Reichwein, *China and Europe*, p. 124
- 15) 山田智三郎著, 蘆谷瑞世訳「17, 8世紀に於ける欧州美術と東亜の影響」p. 122
- 16) レイモンド・ドーソン著田中, 三石, 末永共訳「ヨーロッパの中国文明観」p. 173
- Reichwein, Adolf. *China and Europe*, tr. by J. C. Powell, London: Routledge & Kegan Paul, 1968
- Sampson, Anthony. *The New Anatomy of Britain*, London: Hodder and Stoughton, 1971
- Sirén, Osvald. *China and Gardens of Europe of 18th Century*, New York: Ronald Press, 1950
- Smith-Dampier, J. L. *Who's Who in Boswell*, Oxford, 1935
- 山田智三郎著, 蘆谷瑞世訳「17, 8世紀に於ける欧州美術と東亜の影響」アトリエ社 昭和17年
- レイモンド・ドーソン著田中, 三石, 末永共訳「ヨーロッパの中国文明観」大修館 昭和46年

(参考書目)

- Addison, Joseph, and others. *The Spectator*, ed. by G. Gregory Smith. Everyman's Library, London: Dent, 1950
- Bald, R. C. "Sir William Chambers and the Chinese Garden", *Journal of History of Ideas*, XI, 1950
- Boswell's Life of Johnson*, ed. by Hill, enl. by L.F. Powell, 6 vols., Oxford, 1971
- Chambers, William. *Dissertation on Oriental Gardening*, With An Explanatory Discourse by Tan Chet-Qua. Second Edition. London: W. Griffin, 1773
- The Life of George Crabbe by His Son*, intro. by E. M. Foster, The World Classics, Oxford, 1932
- Edwards, A. T. *Sir William Chambers*, London: Ernest Benn, 1924